

～ いざカンボジア王国へ！ 2020年5月～

JICA 専門家 小松海里

新型コロナウイルスの影響により“新しい生活様式”が提言される中、いかがお過ごしでしょうか。私は4月に一時的にカンボジアから帰国し、遠隔で専門家の仕事を行っております。

カンボジアにおける JICA の本下水道プロジェクトでは、法令や技術ガイドラインの作成支援を行っています。法令に関しては他の国の法令を比較整理するため委託業務を出し、入札の結果、日本の設計コンサルタントのカンボジア事務所と契約をして取りまとめたところです。技術ガイドラインに関しては、アジア開発銀行 ADB のプロジェクトと協力して行っています。これらの文書もこちらで今後ご紹介したいと思います。今回はカンボジアの下水処理場を取り上げたいと思います。カンボジアでは現在3か所の下水処理場が稼働しています。シェムリアップ州、シハヌークビル州、バタンバン州の州都にあり、いずれも処理法は Waste Stabilization Pond (安定化池法) です。

○シェムリアップ州の処理場 処理能力 8,000m³/日

世界遺産アンコールワットのある街の下水処理場です。ADBと韓国の経済協力基金EDCFにより拡張が計画されています。また有数の観光地でもあるため、世界銀行、フランス等複数のドナーにより管きよ整備や制度策定等各種の援助がされています。

○シハヌークビル州の処理場 処理能力 6,900m³/日

シハヌークビルはタイランド湾に面した港湾都市であり、美しい砂浜のあるリゾートでもあります。2016年頃から急激な観光地化が進められており、ホテル等からの汚水による海岸の汚染が問題になっています。カンボジア政府の予算により、A₂O+凝集剤添加の窒素・リン除去まで目標とした処理場の改造計画が進行中です。右の写真は、現状の処理場1池目嫌気池です。



○バタンバン州の処理場 処理能力 1,080m³/日

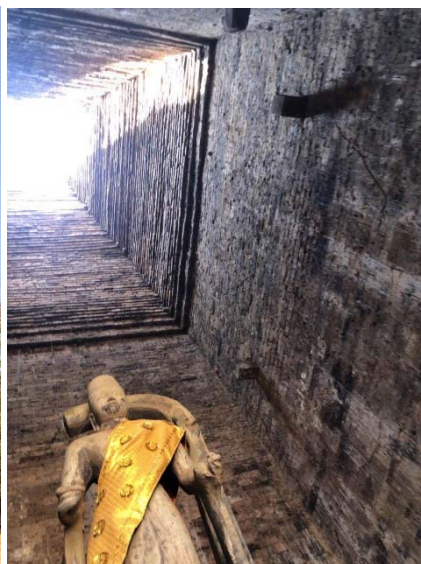
バタンバンはプノンペンに次ぐ第2の都市といわれています。現在、汚水管の破損によりこの処理場には汚水が半分も流入していない状況のようです。ADBにより、新規の処理場2か所、配管、ポンプ場の計画が進行中です。下写真、既設2池目の通性池。楕円形で周囲も自然な感じの仕上がり。



首都プノンペンは日本の援助によりパイロット計画の進行中(PTF法 5,000m³/日)、他の都市にもいくつか処理場建設の計画があります。

2020年3月にカンボジア政府と日本の国土交通省によりシェムリアップにて都市開発に関する会議が予定され、国交省下水道部、JSからも参加予定でした。私もそれにお供しようと思っておりましたが、新型コロナウイルスの影響により会議は延期、日本からの出張もギリギリで中止となりました。現地の方に処理場や現場の案内等を頼んでしまっていたので、私一人でも現地に行こうと思っていたところ、出発当日になりJICAカンボジア事務所から移動中止の連絡を受けてしまいました。ということで、公私ともにまだシェムリアップにもアンコールワットにも行っておらず、前頁に処理場の写真も貼れません。あわよくばこの通信もアンコールワットの話にしたいと思っていたのですが、仕方がないので今回は別の箇所を紹介したいと思います(10か月もカンボジアにいてアンコールワットへ行っていない外国人がいるでしょうか)。

2月に他の専門家お二人と一緒に、カンボジア中部コンポントム州にあるサンボー・プレイ・クックという国内3番目に世界遺産登録された遺跡群に行ってきました。プノンペンからは国道6号を北上し、車で3~4時間程のところにあります。アンコールワットを作ったクメール王朝は9~15世紀ですが、これ以前の6~8世紀には真臘(チェンラ)王国があり、この遺跡群は7世紀くらいの王国首都の跡です。サンボーは多くの、プレイは森、クックは寺院といったような意味のようで、言葉の通りいまは森の中にレンガ造りの寺院がたくさん眠っています。



左:立派な寺院跡の入り口ではライオン像が護りを固めています。

遺跡中には西洋人風顔立ちの彫物もあり、遠く西洋との繋がりも指摘されているそうです。

右:寺院内にはヒンドゥー教の神像(写真はレプリカ)が祀られています。

左:八角形の寺院。壁面には“空中宮殿(フライングパレス)”といわれる希少なレリーフがあります。八角形の建築物といえば、法隆寺の夢殿が思い浮かびますが、同じくらいの年代?



右:樹木に埋れた寺院

観光化がまだ進んでおらず観光客も多くないので、探検気分を味わいたい方にもオススメです。